第一学院高等学校

地域とともに歩んだ 10 年

1 万 5 千名の卒業生が 高萩から持って帰ったもの

日本に株式会社立の通信制高校が誕生し 10 年が経ちました。2003 年に法施行された構造改革特区法にいち早く手を挙げた茨城県高萩市。この海と山に恵まれた風光明媚な土地に開校したのが当時のウィザス高校（2012 年に校名変更）でした。同校の歴史は株式会社立高校の歴史でもあります。同校がこの 10 年で取り組んできた教育は大きく分けて 3 つ。「地域との関わり」「社会との関わり」「自他肯定感教育」。どれも、10 年前から大切にしている視点です。これまでに約 1 万 5 千名が卒業。どれほど生徒が増えても、同校がこだわったのは「1 ／ 1（いちぶんのいち）の教育」でした。

「生徒第一」

1 ／ 1 の教育

沿革

昭和 60 年	日本初の本格的な大検専門予備校「第一高等学院」を創設
平成 10 年	第一高等学院に高校コースを開講
平成 17 年	ウィザス高等学校を茨城県高萩市に開校
平成 20 年	ウィザス ナビ高等学校を兵庫県養父市に開校
平成 24 年	第一学院高等学校へ校名変更
平成 26 年	第 93 回 全国高等学校サッカー選手権大会　全国大会出場
平成 27 年	タブレット端末を活用した ICT 教育を本格的に導入

茨城県高萩市はこんなところ

茨城県北東部に位置し、東は太平洋、西には山地が連なり、その間を 2 つの河川が流れています。総面積の約 85%が山林原野等で、まさに海、山、川、渓谷に囲まれた自然豊かな地域です。また、古くから人々の生活が営まれており、地域には様々な歴史や伝統が受け継がれています。こうした地域資源を活かしたレジャーや自然体験、観光などが魅力です。

▲高萩市の観光名所「花貫渓谷」

〒 318-0001 茨城県高萩市赤浜 2086-1

10 年の歩み
社会との接点から生まれた新しい教育

既存の教育にとらわれない――。それが株式会社にできる大きな魅力。大学へ進学したい、就職したい、不登校を改善したい、コミュニケーション能力を高めたい、自分の目標を実現させたい…。いろんな目的で入学してくる生徒たちに、どんなアプローチで一人ひとりをフォローし、社会で活躍できる人間性を育てられるのか。「1 ／ 1 の教育」の視点に立ったこの 10 年で、多くの教育を創造してきました。

こだわり続けた体験授業

毎年 3000 名以上の生徒が高萩市を訪れる本校スクーリング。期間中は地域の自然や文化などの資源を活かした体験学習がメインに行われます。これらの運営を委託されているのは市内の NPO 法人「里山文化ネットワーク」。会員の方々が講師となり、全国から集まる生徒たちに “生きた知恵” を伝えています。秋に行われる文化祭「橙萩祭（とうしゅうさい）」では、生徒たち自身がサンドアートや、うどん打ちなどを来場者に教えられるよう、事前に講師の方々が作り方を伝授。「ただ体験する」のではなく、しっかり「伝承する」といった役割も担っています。

◀体験を通じて地域の講師から「生きた知恵」を学ぶ

文化祭「橙萩祭」などでも体験できるサンドアート▶

◀ジョブシャドウイング、夢授業などを通じて、在学中から積極的に社会と関わる

「セルフプロデュースクラス」では、社会で役立つための自己プロデュース力、表現力を学ぶ▶

ソーシャルトライアルを通じて未来を見据え、社会との接点をつくる

教室をとび出して学ぶのは、本校スクーリングだけではありません。第一学院高校が進める「コミュニティ共育」では地域全体を「学校」と捉え、キャンパスのある地域の特性を活かした様々な体験を行っています。あるキャンパスでは、「経済について知りたい」という生徒の一言から証券会社の社会科見学が実現し、その生徒が進路を発見した事例もあります。また、ソーシャルトライアル（ジョブシャドウイング・夢授業など）を通じ、「働くこと」への興味・関心を深め、毎日の学習をより意義あるものにしています。

生徒をプラス思考に変える独自の意欲喚起教育「EMS」

生徒の「やる気」を育むためには、「やる気が出ない」「苦手」といったマイナスのセルフイメージをリセットする必要がありました。そこで、脳科学の専門家との共同開発により、独自の意欲喚起教育「EMS」を構築。学習やスポーツ、またその他多くの場面で生徒たちが自ら意欲喚起を起こし、集中力を発揮できるなどの成果を上げています。2012 年には、この取り組みが経済産業省「第 2 回キャリア教育アワード」にて優秀賞を受賞しました。

◀イベントを通じて自信獲得や意欲喚起をさらに高める

第一学院高等学校の意欲喚起教育の成果に対して
経済産業省より
優秀賞受賞
第2回「キャリア教育アワード」

開校 10 周年記念式典より

ゼロから築き上げた「企業と地域」の学校

記念式典で挨拶を述べる
生駒富男理事長

式典同日に行われた文化祭には地域からの来場者で長蛇の列ができた

「なかなか順風満帆にいったわけではない」　2014 年 11 月 22 日(土)、高萩本校で行われた開校 10 周年記念式典のなかで、生駒富男理事長はそう語りました。特区申請、学校開設、スタート初期の混乱、初めてのスクーリング。この間、東日本大震災も起こり、高萩市のある県北地域も大きなダメージを受けました。「高萩市民、市役所、里山文化ネットワークの皆様、生徒自身、保護者の皆様みんなに支えて頂いた」。

同校はこれまでに約 1 万 5 千名の卒業生を輩出しています。生徒が参加する体験学習を担う NPO 法人「里山文化ネットワーク」は、開校当初、会員のほとんどが講師未経験者でした。「みんな自分の生活を守るために仕事をしに来ていた」と話すのは、当初、同法人の理事長を務めていた田中経夫さん。しかし、「そうした講師たちの生き様、一言二言が、生徒たちの生きる力となる、と生駒理事長からお話をもらった」と振り返ります。現理事長の沼田一誠さんは「我々大人が夢を持たなければ、子どもは明日への希望を持てない。体験学習を通じて何を伝えられるかがネットワークのテーマ」と話しました。

生駒理事長は開校後に出版した著書『「変わる」予感、「伸びる」実感 ほんとうの高校』（ゴマブックス 、2006 年）の内容を引用し、「<鳥が選んだ枝。枝が待っていた鳥>高萩市、第一学院高校が巡り合い、教育活動を行うことは、一方の思いではなく、お互いが求め合い、必然のことだった」と話します。出会うべくして出会った地域、企業、学校。それぞれが協力し合うことで、今後 10 年、20 年先も新しい教育を社会に提供できるようです。

第一学院の“これから”

社会のニーズを捉えた未来志向の教育

ICT 教育で可能性を広げる 生徒全員に iPad ® mini を無償貸与

文部科学省も推進している ICT 教育。昨今の情報化社会に伴い、「情報活用能力」の必要性が高まっています。こうした社会のニーズや変化に対応するため、第一学院高校では、2015 年度より生徒全員にタブレット端末 iPad®mini を無償貸与。より楽しい授業を展開し、「学習意欲の向上」「学力の定着」を図ります。

※ iPad は米 Apple Inc. の商標登録です。
※自己所有のタブレット端末の使用も可能。

全国高校サッカー選手権大会 初出場の快挙 10 周年に華を添える

開校 10 周年の記念式典から 1 週間前の 11 月 16 日（日）、同校の「スポーツコース　サッカー部」が「第 93 回　全国高校サッカー選手権大会」に茨城県代表として初出場を決めました。

同部は 2007 年に創部。同年に株式会社立の学校として初めて高校体育連盟に加盟されました。これまで新人大会や関東大会での優勝経験があるなど、創部数年で高い実績を積み上げ、茨城県内では新たな強豪校として名をはせてきました。今年度の県予選は準決勝でライバル校の鹿島学園高校に 2 対 0 で勝利。決勝は強豪の県立鹿島高校との一戦。1 対 1 の同点で迎えたロスタイム、キャプテンの畠山翔太選手が勝ち越しゴールを決め、悲願の初 V を手にしました。

同部は、これまで通信制高校のメリットを活かし、サッカーに集中できる環境で選手たちを育成。サッカー部所属以外にも、卒業生には香川真司選手や柿谷曜一朗選手、酒井宏樹選手など日本代表や世界で活躍するプレーヤーや J- リーガーも多数輩出しています。

お正月に行われた全国選手権は残念ながら初戦敗退。しかし、試合の模様がテレビ放送されるなど「第一学院高校」の名は全国へ。何より第一学院の生徒だけでなく、通信制高校で学ぶ生徒たちに多くの勇気を与えました。

JR 高萩駅には
県優勝を祝う横断幕も掲げられた

I N T E R V I E W

様々な苦悩、支えられた 10 年を全国へ繋ぐ

後半ロスタイムのロングシュート

3 年生 サッカー部 主将
畠山（はたけやま） 翔太（しょうた） さん

創部 8 年目、開校 10 周年という節目の年に全国大会初出場を果たした「スポーツコースサッカー部」。通信制のメリットを活かした恵まれたサッカー環境と効率の良い練習時間。創設時には“サッカーの神様”ジーコがスーパーバイザーとして後押しするなど、第一学院高校が初期から力を入れてきた分野です。同部の畠山主将に全国出場にかけた想いなどを聞きました。

今年のチームは早々から期待されていましたが、春夏とあまり結果が振るわなかったんです。当時はチームの気持ちがバラバラの状態で、キャプテンとしてもかなり悩んだ時期でした。部員は 40 名ほどですが、僕らは長い間、毎日をほとんど一緒に過ごしますから、お互い何を思っているかがある程度わかります。その部分がときに衝突したり、相性がおわなかったりする。小学生のときにも一度キャプテンを経験していますが、高校生では訳が違う。いろんな感情がぶつかり合って、そのうえサッカーはプレーの中でコミュニケーションを図るスポーツだから、余計にまとめるのは難しかったんです。

ただ、夏以降、選手間で何度もミーティングを重ねました。そうしたら少しずつ試合に勝てるようになりました。僕自身もその間にチームメイトとの接し方や伝え方を工夫した。コミュニケーションにおいては物凄く学んだ 1 年でもありましたね。

優勝を決めた決勝ゴールは、ロスタイムからの僕のロングシュートでした。不思議なことに、アシストが回ってきた瞬間、全体がスローモーションに見えたんです。距離にしたら 30 メートルくらい。でも、「ここで打てば必ず入る」という確信がありました。小さな頃からサッカーを続けてきましたが、あんな経験は生まれて初めて。後に監督からは「畠山自身が経験した多くの苦悩をボールの後ろから見ているように見えた」と言われました。

チームのことで弱音を吐くこともあったし、ライバルが多い中で厳しい練習にも耐えてきました。そうした一つ一つが自分を成長させ、チームに影響をもたらし、今回の結果を生んだのだと思います。

開校 10 年ということは意識していませんでした。だけど、地域をはじめ多くの人に「応援されている」という実感はもちろんありました。普段、練習場へ向かう途中や清掃活動などで地域の方々からたくさん声をかけてもらいます。サッカー部は地域でも特に目立つ存在。高萩の地で 40 名の高校生が一斉に移動するなんて第一の選手くらいですからね。決勝戦のスタンドもチームカラーのオレンジで染まりました。地域と学校、みんなのチームプレーで勝ちとった優勝だと思います。

▶第一学院高等学校の詳細は P118